

型細胞について核の直径を計測すると、小型核の異型細胞が約7割を占めていた。1枚の標本上に異型細胞集団がどの程度出現していたのか計測すると、1ヶ所から3ヶ所の集団が約6割を占めていたが、10ヶ所以上の多数の集団が認められる標本も約2割あった。これら多数例の中には、同一の細胞検査士が連続して提出された検体を連続して誤判定している症例があった。気管支鏡検査、又は肺穿刺施行時の細胞診で「誤陰性」と思われた件数の合計は28件に及び、誤陰性例の半数近くを占めていた。2005年5月に2人の細胞検査士でダブルチェックを始めてから以降も、2005年が1件、2006年も1件、2007年は4件の誤陰性例があった。以上の事から、小型核の異型細胞の判定、異型細胞が数ヶ所にのみ認められる場合の判定、孤立性に出現している異型細胞の判定、新鮮な検査材料での判定、一人の細胞検査士が同一患者の検体を連続して鏡検することに問題のあることがわかった。細胞診で「誤陰性」を減少させるためには、異型細胞の判定基準について個人差をなくすことが必要であり、ダブルチェックを行う細胞検査士の責任は大きいと考えられた。

2008年5月22日

◆ 当院で治療した耳介血腫症例

耳鼻咽喉科 本間 朝 朝倉 光司
小柴 茂

耳介血腫は耳介皮下に血液成分が滲出、貯留したものである。稀な疾患ではないが、血腫を放置すると耳介の変形が著明となる。また、一度の穿刺、切開では再発する事が多い。手術書には、耳介にボタンを縫合したり、軟膏ガーゼで圧迫固定する治療法が示されているが、簡便ではなく、また日常生活において美容面からも好ましい方法ではないと考える。

今回我々は、翼状針と採血管を用いた持続吸引する方法で耳介血腫例を治療した。対象は、1998年7月より2008年2月まで当院で治療した耳介血腫、11例である。11例中9例に上記の持続吸引方法で治療し、全例、血腫は改善し耳介の変形をきたさなかった。外来にて局所麻酔下での処置が可能であり、吸引バックに採血管を用いる事で、日常生活上ほとんど支障をきたさない事が判明した。

2008年7月24日

◆ 子どものうつ病患者における抗うつ薬による情動変化および自殺関連事象

精神科神経科 清水 祐輔

目的：近年、新規抗うつ薬による自殺関連事象増加の

問題が議論になっており、それに関しFDAはいわゆる activation syndrome を提唱したが、この病態については不明瞭な点が多く検討の余地があると考えられる。

方法：大学病院を受診した18歳未満の児童・青年期症例の中で、DSM-IVの診断で大うつ病性障害に該当した71例の診断分類、薬物療法、そして抗うつ薬投与中の情動変化および自殺関連事象について検討した。

結果：診断分類としては、初診時診断の大うつ病性障害から、追跡終了時には8例が双極性障害、1例が統合失調症に変更となった。抗うつ薬治療の評価は18.3%が著効、36.6%が有効、18.3%やや有効、12.7%が不変、1.4%が悪化、11.3%が躁転、1.4%がその他という結果であり、躁転例では気分障害の家族歴が統計学的に有意に多かった。抗うつ薬投与中に何らかの情動変化をきたした症例は18例存在し、13例でコロンビア分類の何らかの自殺関連事象を認め、このうち6例で「自殺行動/念慮の可能性のある事象」を認めた。病態の内訳はジッターリネス症候群（アカシジア様症状）2例、抗うつ薬投与直後・増量直後の急激な躁状態・混合状態2例、抗うつ薬減量によるうつ病の悪化1例、抗うつ薬による統合失調症の顕在化1例であった。そのうち2例で「自殺行動/念慮」を認め、その病態はジッターリネス症候群と投与直後・増量直後の急激な躁状態・混合状態が1例ずつであった。

結論：いわゆる activation syndrome の本態は、主にジッターリネス症候群と抗うつ薬投与直後の急激な躁状態・混合状態であると考えられた。これらの出現時には、明らかな自殺念慮も出現しており早期の病態の把握と迅速な対応の必要性が示唆された。

2008年7月24日

◆ 当科における中下咽頭内視鏡検査の試み

消化器科 斉藤 真由子

中・下咽頭癌はこれまで進行した状態で発見されることが多く、予後不良な疾患のひとつである。近年、狭帯域フィルター内視鏡（Narrow Band Imaging；NBI）により、中・下咽頭領域の表在癌の診断が可能であることが報告されている。また、咽頭癌の危険因子は、食道癌と同じく、喫煙、飲酒、中高年以上の男性などであることが分かっている。当院には、NBI観察可能な内視鏡装置があり、室蘭市にも高危険群の患者が多数いることから、我々は、咽頭癌高危険群に対する、咽頭NBI内視鏡検査の前向き臨床試験を実施した。本試験では咽頭癌の発見率に加え、患者へのアンケート調査等による、咽頭内視鏡検査の認容性も併せて検証した。院内研究会では、NBIについての紹介、咽頭表在癌の所見等を説明し、当科での臨床試験の中間報告として、2008年6月の消化器